

平成14年度

# 北海道高等学校教育研究会

## 会 報

第 78 号

### ごあいさつ

北海道高等学校教育研究会

会 長 島 隆

ようやく春の兆しを感じられる頃になりました。会員の皆様には、平成14年度末を迎え、また新しい年度の準備のために何かと多忙なことと存じます。

さて、創立40周年記念研究大会は、多くの皆様のご協力をいただき、新学習指導要領の推進に当たっての課題解決の方策や教師としての多面的な力量を養うなどさまざまな成果を得て、終了することができたものと確信しております。これも皆様の積極的な参加、運営に当たられた関係者の方々のご尽力はもとより、本研究会の活動に多大なご理解とご支援をいただきました関係機関や各学校の皆様のお力によるものと心より感謝申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。

第1日目は、開会式と全体講演が北海道厚生年金会館ホールに全道各地から2,700名を超える多くの方々の参加を得て開催されました。開会式では、会の活動に寄与された功労者への表彰の後、示唆に富むご挨拶、ご祝辞をいただき、全体講演では、記念講演として「日本人のこころ」と題し、五木寛之氏にお話しいただきました。

記念講演は、『大河の一滴』『運命の足音』をはじめとする作品を読んだときの感動とはまた違った大きな感動が聞く人それぞれのところに響いた講演であったと確信しております。

「見える世界と見えない世界、現実と非現実、こういうものの二重構造が大切であり、この両方がなければ、世界が色あせて見え、世の中もつまらないだろう」と『運命の足音』にあります。講演の「暗愁」についてのお話しの中にもこの二重構造の大切さがあり、感銘を受けた方々も多かったのではないのでしょうか。

『僕のみつけたもの』（集英社）の『深夜にひとり笛を吹く』の文「ぼくは、時々この土笛を吹いてみる。ホウ、ホウというその音は、『コマッタ、コマッタ』ときこえるし、『ガンバレ、ガンバレ』ともきこえる。…歌口に唇を触れることで、大地に接吻したような感覚をあげあわせてくれる笛…」に氏の姿を重ね合わせながら記念講演を閉じることができました。

第2日目の13の教科部会、第3日目の新教科「情報」部会では、示唆に富む講演や意欲的な実践・研究の発表と協議が行われました。40周年という記念すべき年に初の開催となりました「情報」部会は、平成13年度から多くの先生がその設立を望み、全道各地の17名の先生が中心となって設立に向けて準備をしていました。その熱意が本会を動かし、部会設立と部会参加者170名の熱意あふれる協議が行われ、会の成功に繋がりました。ご尽力いただきました方々に感謝と賛辞を贈ります。

教育をめぐる課題は尽きることなく多く、日々の指導に困難を感じることも少なくありません。しかし、一人では解決できないことでも、仲間と共に頑張れば克服できることは多々あります。各地の学校で頑張っている教師が、出会い、交流し、明日への意欲を高める研究会は不可欠です。「高教研」はそのための重要な機会であり続けたいと思います。この大会報告をもう一度お読みいただき、その意をお汲みいただければ幸いです。

## 40周年記念大会の報告

- (1) 開会の辞
- (2) 40周年記念功労者の紹介
- (3) 挨拶

### 来賓祝辞

北海道教育委員会  
教育長 相馬 秋夫 様

皆さん、明けまして新年おめでとうございます。

只今、ご紹介いただきました、道教委の相馬でございます。第40回の北海道高等学校教育研究大会の開会に当たりまして、一言お祝いを申し上げたいと思います。

本研究会が、創立40周年を迎えて、その記念大会が全道各地から多数の先生方のご参加を得まして、このように盛大に開催されますことは、誠に喜ばしく、心からお祝い申し上げます。

本研究会が全国にも類を見ない充実した活動を続けてこれ、本道の高等学校教育の充実・発展に大きく貢献されていることに対しまして、心から敬意を表しますとともに、ご参会の先生方におかれましては、日夜、生徒の指導にご尽力をいただいていることに対しまして、改めて心から感謝を申し上げる次第でございます。

さて、今日、社会が大きく変化しております。地方分権、規制緩和などが進む中におきまして、高等教育におきましても、心の教育の充実を図り、個性を伸ばすという観点から、特色ある教育活動が全国規模で進められております。

道教委といたしましても連携型中高一貫教育の導入や、単位制高校、総合学科などの設置を進めているところでございまして、また、「未来をつくる高校教育推進事業」においても、特色ある学校づくりに取り組んでいる学校を積極的に支援するなどして、それぞれの地域の特性を活かした特色ある高校づくりに取り組んできているところでございます。

このような中、各学校におきましては、校長先

生を中心に先生方が一丸となり、地域ぐるみで地域の人材の育成に努めるなど、地域に信頼される開かれた学校づくりを進めるとともに、21世紀を担う生徒たちが、夢を持って生き生きと活動する、「夢と活力」にあふれた学校づくりを推進していただいていることに対しまして、先ほど島会長、沖野会長より、教育に傾ける情熱のあるお話を伺いまして、私としても大変、意を強くして、力強く感じているところでございます。

また、各学校におきまして、魅力ある学校づくりを目指し、創意・工夫に富んだ教育活動を展開しておりますが、生徒一人一人の個性を最大限に伸ばし、次の北海道を担う社会人として必要な「生きる力」を身に付けた人材を育てるためには、日々、生徒に接しております先生方の力によるところが大きなものであると、私は考えております。皆様お一人お一人が、日頃から自己研鑽に励むとともに、相互に学び合いながら切磋琢磨し、教師としての資質・力量を常に高めていただくことが大切であると考えています。

こうした点におきましても、全道の教員の皆様が一堂に会して、この三日間、先ほどお話のありました、完全学校週5日制や4月からの新学習指導要領の実施といった、変革の時代に対応した高校教育について、論議を深められるという本研究会は、極めて大きな意義を持つものでありまして、この機会に普段の教育活動の成果などをお互いに交流し、その成果を今後の教育活動の充実に反映



させていただきたいと願っておりますし、そうしていただければ、大変ありがたいなと思っております。

終わりになりますが、皆様のご健勝と本研究会の益々のご発展を心から祈念申し上げまして、お祝いの言葉といたします。

どうもありがとうございました。

## 来賓祝辞

札幌市教育委員会

教育次長 本間 英昭 様

北海道高等学校教育研究会の記念すべき第40回大会の開催にあたり、札幌市教育委員会を代表いたしまして、私教育次長の本間でございますが、一言お祝いを申し上げます。

北海道高等学校教育研究会が発足いたしました昭和38年は坂本九さんの「上を向いて歩こう」が全米ビルボードの一位になるとともに、最初のTV宇宙中継が行われた年であり、ある意味で日本と世界との距離が大きく縮まった年でありました。当時の日本は高度経済成長を背景として、国民の後期中等教育への関心やニーズの高まりなどから高等学校への進学率が急激に伸び、7割を目前としている頃でもありました。以来40年間という激動の時代の中で本研究会は日常の教育実践を基盤としながら着実に研究実績を積み重ねられ全道の高等学校教育の推進に重要な役割りを果たしてこられました。会員の皆様をはじめ関係各位に改めて深く敬意を表する次第であります。

さて、高等学校での新学習指導要領実施を今年の4月に控え、今教育は第三の改革と呼ばれる大きな転換期を迎えております。少子化、国際化などといった現在の日本社会の変化にしっかりと対応していくためには教育の果たす役割りが極めて重要であり教育制度を含めた学校教育そのものの見直しや再構築が求められております。しかしながら、教育には常に不易という面があることも忘れてはなりません。世界の優れた伝統文化を尊重することや、教師と生徒の信頼感に裏付けられた学びなど時代を超えて変わらない部分を大切にしたバランスの取れた改革が必要であります。

昨年ノーベル賞を受賞いたしました田中耕一さんの小学校4年生のときの詩に、「自分の頭で考え、自分の足で歩き、自分の手で作ることの必要は、今でも、どんなに進歩した未来でも同じことだ。僕の考え、僕の思いは、いつまでも僕のものでありたい。」というのがあります。今子供たちに強く求められることは、自ら考え行動し将来を主体的に切り拓いていく力であります。札幌教育委員会といたしましてはこのような考え方に立ち、新たな制度の導入も視野に入れながら、一層魅力ある市立高等学校を目指した教育改革推進計画の策定を進めてまいりましたが、新年度からその具体化に向けて可能なものから実施していく所存であり、関係の皆様方のご理解ご支援をお願いする次第であります。

終わりになりますが、本研究大会の主題である「時代の変化に対応する高等学校教育の創造」を実現するためにも、今日お集まり戴いた皆様一人一人の知識を知恵に変えることが将来柔軟で創造的な発想につながっていくものと信じております。本研究大会の成果がこれからの北海道の高等学校教育の指針となりますようご期待申し上げますとともに、北海道高等学校教育研究会が今後益々充実発展されますようご祈念申し上げご挨拶といたします。ありがとうございました。

## 挨拶

北海道高等学校校長協会

会長 沖野 隼夫 様

皆さん、あけましておめでとうございます。全道335校の高等学校を代表いたしまして、一言ご挨拶申し上げます。穏やかな新春を迎えられましたこと、本当にご同慶のいたりと存じます。

この北海道高等学校教育研究大会も第40回目という大変節目の年を迎えることができました。私自身、37年の教職生活を送ってまいりましたが、この高教研が私自身の心の支えであり、研修の場として大きく育てていただいたという思いで一杯であります。

この高教研の時期はどういうわけか、大雪が降るといふそういった最悪のコンディションという

ことも随分ありました。今日は穏やかな日を迎えられ、関係者の一人として胸をなでおろしている所であります。

昨年、完全学校週5日制の導入ということで、学力低下論争ということが一気に吹き上がりました。私ども教職に身をおくものにとって、そういった声をなんとしてでも封じなければならない。そのための、日々の授業の工夫・改善、そして子どもたち一人一人に目の行き届いた教育を推進していかなければならない。会場の皆様方一人一人、このことは強く胸に抱いていることだろうと思っております。

昨年、ノーベル賞がお二人同時受賞ということで、大変大きなうれしいニュースがございました。受賞されました、小柴先生、田中先生、お二人とも異口同音におっしゃっておられたのは、成長の過程ですばらしい先生にめぐり会えたからであると申しておりました。この言葉は、同じ教職に身をおく私どもにとって大変誇りであり、うれしい言葉でありました。あの言葉を聞いた時に、教師としての責任の重さというものを改めて感じましたし、さらに、勇気付けられた思いがいたしました。このことは、多分私一人ではないと思っております。教師という職業に身を置く者にとって、今まさに世の中の目というものは大変厳しいものがあります。その中で、われわれがつくせるのはやはり、日々の絶え間ざる研修、こういったところにあるのではなかろうかと思っております。

いよいよ新年度から、新学習指導要領が学年進

行で導入されます。それに伴って、教科「情報」が入ってまいります。本研究大会には、「情報」の部会があらたに設置されました。大変うれしいことです。明後日になりますか、部会で活発な意見が出され、そして、お互いに手探りの中から、生徒一人一人にとって身につく教科としてその成果を期待したいと、このように思っているところであります。どうか、今日、明日、そして10日にもございますが、この研究大会で、多大な成果をあげますことを心よりご期待申し上げております。

一方、年々会員数が減ってきている、これも大変憂慮すべき問題だと思いますが、どうか今日ご参加の先生方お一人お一人が、学校に戻られまして、隣の同僚に、一声声をかけていただいて、「来年はぜひ参加しよう」という言葉をかけていただければと思っております。どうかご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりますけれども、この40年の間、事務局を担当してこられました札幌旭丘高校の校長先生をはじめ、教職員の皆様、本当にここまで発展されたこの研究会、心より感謝と敬意を表したいと、このように思っております。また、各15支部の事務局のそれぞれの担当者の方々のご努力本当に感謝申し上げたいと思っております。

本会が益々参加者を増やしながら、さらに50年、60年先を立派な研究大会となって、つちかっっていくことを、心より祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

## 第一日・記念講演

〔講演〕

『日本人のこころ』

五木 寛之 氏



## 第二日・教科部会

### ●国語部会

#### 〔講演要旨〕

#### 「十代のぬくもり」

作家 谷村 志穂 氏

長らく独身でいた私が結婚し、昨年子供を産んだ。結婚もせず、子どもがいない間は、十代の時間で時間が止まり、ずっと子どもの立場でいたような感じがする。だから、それまでは十代を俯瞰ではなく、一人称の主人公を中心に描いてきた。しかし、子供を産み、そういう感覚が変化したような気がする。若い頃に読んだ三浦綾子の『氷点』などを読み返すと、自分の視点が母親の方に移っていることに気づかされる。十代の主人公陽子の多感さなどが少しやっかいに感じるようになっていく。少し寂しいが、もう十代を書くことは私には難しいのかもしれない。

以前、若い芸術家が集まった都心の廃校で行われたイベントの中で一度だけ国語の先生になったことがある。その時、「国語というのは何なのか？」という事を考えた。教壇に立った私が集まった人たちに「国語とはみんながそれぞれ、独りぼっちにならないために学ぶ事じゃないかな？」と語りかけると、本当に皆真剣に聞いてくれた。その時、「言葉を通して何かを伝えるのも悪いものではない。生涯これに向き合っていきたい。」と思った。

先生は色々な意味でリーダーだと思う。今いる場所がどんな場所であるかというヒントを先生を通して生徒がもらえると、それを足がかりにどこかに出かけている。先生たちには、色々な世界への窓口を作ってあげて欲しいと思っています。

(記録：朝妻)

#### 〔研究発表〕

#### 「地域を教材化する」

檜山北 熊木 啓二

地域に関係する教材を使い、そのため生徒の地域に対する自覚が深まると同時に、地域巡検、さらには総合的な学習の時間への発展も他教科からの協力をうけ、実現した。この学習は生徒の中でさらに発展し、演劇化やプロジェクト発表へとつながった。このように学習を発展させるには、今

までの「理解」させることを中心とした教員の授業に対する意識改革、と生徒の「気づき」と「覚醒」が教員のものとなる必要がある。

(記録：太田)

#### 「表現指導と評価」

様似 三井 智和

評価基準を明らかにしてスピーチ等を行い、生徒に相互評価させることなどを行った。その際、実際に話したことをテープ起しさせてみるなどの活動を通して、普段の言語活動を自覚させ、双方向に「伝え合う力」を自覚させた。それをもとにディベートなどにも取り組んでいる。授業での評価は、生徒のものと教員のものとは差異が生じるが、それらを鑑みて行っている。

(記録：太田)

#### 「他者に繋がってゆく力を育てるために」

札幌東陵 宮下 義晴

授業の中で「理」(複数のものを結びつける力)を「教材で教える」ために、平成元年から今までの14年間にわたって「教科通信」(1600枚あまり)を用いての指導を行ってきた。その内容は①文章を理解する上での基礎②作品像を具体的に捕らえるための教材③筆者に関わる情報④作品世界をより豊かにするための資料⑤書き込みプリント⑥素晴らしい章句の紹介⑦生徒に関する情報などに分類できる。

これからの国語教育のために、教員側も「ほっかいどうスクールネット」を利用した「教科研究の成果」のやりとり等を活発化し、今後も自由に他者と繋がっていくための手段を模索しなければならない。

(記録：朝妻)

### ●地歴・公民部会

#### ■世界史部会

#### 〔講演要旨〕

#### 「世界システム論の世界史観

ー基礎から新知見まで」

北海道大学大学院文学研究科

助教授 山下 範久

世界システム論登場は既存の歴史観に対する批判として登場した。

この考え方は地球上の世界は決して単一な世界ではなく、さらに一定の基準による発展の優劣があるわけではなく、それは単なる「差異」でしかないと捉える。そして1500年以降の世界が資本主義的な展開を見せた時代と捉え、世界的な規模でのシステム化が進行したと考える。一方、このような主張に対して欧州中心主義という批判が起きる中、現在世界システム論は、中華朝貢貿易システム論、13世紀世界システム論、「超」世界システム論、近世地域システム論などの新たな展開をみている。

〔研究発表〕

「平和資料記念館見学を活用した

国際平和の授業展開」

檜山北高教諭 村中譜佐朗

見学旅行において、平和資料記念館、原爆ドームを見学するにあたり、その1ヶ月前から、原爆ドーム、核兵器、冷戦、原水爆禁止運動などについて、ビデオやプリントで事前に学習した。そして、実際に見学した後に、平和をテーマとした詩を書いて提出することにより平和の意義を考察させた。

「概念史とその意義」

札幌厚別高教諭 横山 茂

『歴史的基本概念辞典』の編集者の一人であるラインハルト＝コゼレックの著書『概念史と社会史』・『歴史的概念辞典』序文を試読し、また、「市民社会の概念史」や「歴史的基本概念」とは何か、ということ进行分析する事により、概念史とその意義について考察した。

## ■日本史部会

〔講演要旨〕

「函館と云う地名

—何故、函館に人が住むようになったか—

函館市史編さん室室長 紺野 哲也 氏

従来より「函館」の地名の語源は「七重浜から見た館が箱型に見えたため」という説が、一般的であった。しかし、18世紀に函館の語源についてふれられている史料では、その説が俗説である

と紹介されているものの、19世紀に作られた函館区史で、それが俗説とされているという部分が削除され、俗説ではないと補強されたために、現在一般的に言われている説が定着したのでは、と論考された。また、同時に、函館の町で暮らすものとしての視点からも従来の説に疑問を持ち、最終的に「函館」の語源は「ハク＝チャシ」（小さい砦の意）が転訛したものではないか、という岡田健蔵氏の説を紹介された。史料の扱い方や史料批判の大切さについて再認識させられる、示唆に富んだ講演内容であった。

〔研究発表〕

「実物教材等を活用した授業実践」

北広島西 高橋 一矢

事物教材は、生徒の受ける印象が強く、加えて生徒が教材に依拠しながら思考力を働かせることが出来、自分で歴史的発見をすることにより知的興奮を味わい、結果として生徒の内在する力を引き伸ばすことが出来る。「五榜の掲示」の実物などを使っての説明は、改めて事物教材の、持つインパクトと可能性について再考させられる発表であった。

「日本とロシアの文化比較

—国際理解と地域学習を取り入れた授業—

稚内定時制 岩間 洋之

稚内の地域的特性で、ロシア人の存在が身近であるものの、一方で根強い偏見がある。そこでその考えを取り除くために、日露の文化比較という観点で「総合」の授業で、プリントを使った下調べの授業ののち、実際にロシア人講師を招いての授業を実施した。生徒にも好評である様子が、ビデオを使っての説明で伝わってくる発表であった。

## ■地理部会

〔講演要旨〕

「鉄道から見た北海道」

フォトライター 矢野 直美 氏

私の仕事の90%は鉄道の旅です。「駅と話せたらいいなあ。」と思います。出兵・集団就職・出会い・別れ…色々な話が聞けそうです。

北海道には四季もあり、趣味や旅情の面からも

考えると、廃線が増えているのは残念です。土地柄から言っても、簡単になくしてはいけないのではと思います。

私の地図は道路ではなく、線路からできています。鉄道好きな人は隠さずに、大きな声で「私は鉄道が好きです!!」と言いましょ。

〔研究発表〕

「インターネットを活用した授業展開例」

訓子府 宮沢 護

生徒を主体的に取り組ませるために、インターネットを利用し、環境問題について考え、まとめとして新聞を作成させた。浅い認識にとどまったが、自ら調べる姿勢が見られた。課題として、膨大な情報から正確に必要な情報を取捨選択する難しさがある。

〔研究発表〕

「地理的な見方・考え方を培う

学習指導の工夫について」

大野農業 大端 開

新学習指導要領を意識した授業を展開した。地理嫌いを作らないように、本校の生徒の実態に即し、内容の重点化、学び方を学ぶ学習を行った。基礎的な指導の量、評価方法の工夫・改善を今後の課題とする。

■現代社会

〔講演要旨〕

「現代社会が失ったもの

～「人権社会」の落とし穴」

札幌市保健福祉局健康衛生部

保健指導担当課長 渡部 正行 氏

高度経済成長の終焉とともに「個を問わず、状況を問う時代」になった。社会問題を人権と結んだために、人権が安くなった。自分らしくとは幼児期までしか通用しない。人権の尊重が「自分が…」という人を生み出した。自己愛性人格障害という嫉妬の塊から心の育成が始まり、成長には痛みが伴う。そのためには地域社会（他人の海で泳ぐ技術）が大切である。物事の本質は状況を問うだけでは解決できない。現代社会をどう問うかがカギである。

〔研究発表〕

「総合的な学習の時間を視野に入れた

国際理解教育の実践」

鹿追 小笠原一彦

体験を重視し、地域・他教科と積極的に連携し、国際理解・地域理解を深めることなどを目指した実践である。

主な実践には、地域巡検「士幌高原道路問題」（3年）、国際事情学習「カナダ短期留学（町の支援あり）」（1年）「アジア・アフリカの国」（2～3年）を題材にしたものと、国際事情学習に関連した指導（3年）の3つの取組がある。巡検、外国人を招いての講演会・交流会を効果的に実施し成果を上げている一方、課題も残されている。

■倫理部会

〔講演要旨〕

「近代社会とは何か」

明治学院大学教授 竹田 青嗣 氏

近代とは何かと説いた場合、それは2つの観点から説明できる。1つめは、近代哲学の成果である。これには、次の3つがある。その第1は、近代哲学の中心問題は「主観と客観は一致するか」という認識問題で、第2は「人間」概念の変更、第3は「社会」概念とそのシステムの設計である。これらは、カトリックとプロテスタントが対立する中で市民革命が行われ、ロック・ルソーによって社会契約説が生み出されたものを、カント・ヘーゲルが思想的に補っていく過程の中で展開されていったものである。こうした近代哲学の成果によって導き出された近代社会の意味は何か。これが、2つめの観点である。その第1は、社会構造の変化によって、「社会」と「人間」の存在本質が変化したことである。その結果、自由と平等の二律背反が難問として残った。第2は、「人間」の存在本質についてである。これは、自由の相互承認と存在配慮のゲームによって理解できる。

〔研究発表〕

「エンカウンターについて

～現代の青年期についての考察～」

石狩南 鈴木 究

今回は、現代の青年期を取り巻く諸問題を考察

し、生徒の人的成長を促すカウンセリング技法である構成的グループエンカウターの可能性を探る発表が行われた。現代の青年期を取り巻く諸問題は、人間関係の希薄化と自己疎外に収斂される。そうした中で、構成的グループエンカウターは有効な教育技法になっている。その背景として、時代の変遷がもたらしている青年期像が挙げられる。それは、ぼかし言葉を使い、自分を見失ってあつけらかんとしており、脱力主義の中で生きがいを見失っている青年期像である。その上で社会性が失われつつある彼らに、ソーシャル・スキル教育が必要になっており、これに応えるために構成的グループエンカウターが教育界へ導入された。前半は、それについての説明が行われ、後半は、参加者全員でそれを体験した。学級開きに見えるものを中心に体験した参加者は、互いにうち解け合いながら研修を深め、和やかな雰囲気終了した。

## ■政治経済部会

### 〔講演要旨〕

#### 「テロとの戦争」と国際政治

北海道大学法学部（国際政治学科）

教授 中村 研一 氏

「9・11」テロは、犠牲者の生命以上のものを破壊した。我々の立っている底が抜け現実から逃避したくなる感覚と身近で潜在的な敵の存在をもたらした。その衝撃は、未だに政治的意味を受け止めかねるほどだ。次に何が生じるか、どう反応すべきかわからない流動性の中にある。

これまでの「テロ」の域を超えて何が異常で、どう解釈されるか。歴史的類推とそれを作り出した世界構造を考察し、「テロとの戦争」と国際政治の役割を考えてみたい。

テロとは戦わなくてはならないが、「テロ＝手段」であるために、敵を見つけて根絶できる性質のものではない。そうした認識を深めた上で、ヒステリックな反応をしないこと。そして、反テロ戦争という直接療法よりも、内側からの社会崩壊、人種・異文化間の疎外感や挫折感、第三世界の経済格差といったテロの構図をつくる体質の改善に目を向けるべきだろう。

I 9・11

II テロリズムをどうとらえるか

III 米ブッシュ政権とテロ

IV テロとの戦いとその意味

### 〔研究発表〕

#### 「授業における情報機器の活用方法について」

白糖 佐藤 匡

受け身になりがちな地歴公民科の授業において、生徒が主体的に取り組めるよう生徒の興味関心を引き出す試みとして、平成12年度から「壁新聞コンクール」と「裁判所見学」を授業に取り入れている。

#### 「心を育てる公民科教育を目指して」

上富良野 矢橋 佳之

生きる力を育むために、様々な角度からのアプローチを試みている。授業では「なぜ」「どうして」にこだわる暗記にとらわれない授業の展開。また総合的な学習の時間との連携による交通安全教育・消費者教育。学校設定科目の「社会福祉基礎」との連携によるノーマライゼーションを扱う教材の提供などを行っている。

## ●数学部会

### 〔講演要旨〕

#### 「内側から見た大学入試」

京都大学名誉教授

桜花学園大学教授 岩井 齊良 氏

35年間、京都大学入試に携わり、また、その間、大学入試センター試験（共通一次試験から）や府立大学・私立大学（立命館・同志社大学等）の入試にも数多く関わってきた経験をもとに、①今日のセンター試験の数学の解答形式、②入試問題作成の過程、③採点作業と採点の心得、④受験生の答案の心得について述べられた。

①について、当初、文部省官僚を始め多くの準備委員の方々は選択肢の中から解答を選ぶ方式（数学以外の教科で行われている）を考えており、今日の数学で行われている数字を選ぶ方式は、当時の文部省官僚には思いもよらないことだったため猛烈に反対されたが、3年間の準備期間の中で試行錯誤を繰り返し、今日の形式が確立されたのである。



②について、7月の第一回目の委員会では、約20名の委員で指導要領に従って教科書の各単元を洗い出し、約60単元を助教授以上の先生方に振り分ける作業を行う（一人、3～4題の問題を作成することになる）。第二回目の委員会では、持ち寄られた約90題の問題全てについて、作成者から作題意図・解答などの説明を受け、全員で問題の検討を行う。これは1日の作業となるが、前期・後期（文系5題・理系6題のべ22題の）入試問題の素材がここで作成されるわけである。8月に入り、若手助教授をモルモットとして入試問題の素案を解答させ、小委員会（入試委員長・副委員長・数人の入試委員）によって素案をさらに検討改良し、正式に決定となる。この際、高校数学の学習範囲をカバーしているか、問題に偏りはなにか、特に京都大学が長年大切にしてきた、問題解決能力を試す問題（確率）、決まった解法パターンを持たない問題（図形）などが出題されているかも検討される（大学入試にも、それぞれの大学の願いが込められているのである）。

③について、人格的にも完成されていない受験生の答えは不完全なものである。したがって、記述式の数学の採点には判断力が必要で、これは数学の先生以外にはできない作業である。京都大学では、助手以上の先生約140名で採点業務を行うが、同一問題の採点を約1000人分しなければならない。採点基準委員会から採点基準が出されるが、複数の先生方で同一問題を採点しているため、採点会場のいたるところから議論の声があがってくる。この議論は徹底的に行われ、何を重視すべきなのか（計算・考え方など）段階を置いてのきめの細かい基準を作っていく。前述したが、受験生の答えは完全ではないことを前提に議論されているので、言葉使いの細かいところなどで減点することなどほとんどないのである。

④について、採点から考えて、受験生は細かな言葉使いなどを気にした完璧な答案を作ることが心かけるより、自分の数学的思考方を受験生なりに確立して、問題に対する自分の考えを採点者に伝えるメッセージと思って答案を作った方が良いのである。つまり、自分の考え方が相手に伝わる答案を作ることが大切である（自分の思いが相手

に通じるよう、相手へのラブレターと考えて解答すると良い）。

総じて、数学の答えは、限られた時間内で起承転結をまとめなくてはならず、このようなことを求められている答えは数学だけである。これは実社会において非常に役に立つことで、数学を計算の学問と捉えてはいけぬ面がここにある。つまり論理的に物事を考えることやそれらを整理すること、整理されたことを解決すること、そこには、日常生活で社会人として現代社会を生きていくノウハウがある。数学の試験答案にはそれらが課せられており、受験生が社会人として成り立つための基礎的な訓練ができるのは数学だけである。そのためにも、昨今のような考えなくてもいいような入試問題は避けていきたいものである。

最後に、岩井先生の普段の数学的アイデアと、数学を通じて伝えたいことが掲載されているホームページ『数学切り抜き帳』のアドレスを紹介する。

<http://www.shinko-keirin.co.jp/>

#### 〔研究協議〕

主題『基礎・基本の定着をはかり、創造力を養い活用する能力を育てる数学教育』（数学的活動を生かし、自ら学ぶ力を育てる授業の実践）

#### 1. 『『納得の数学』』に向けての授業実践』

夕張緑ヶ丘実業 長尾 良平

頭を使わないことを続けていると、そのうち数学に限らず「どう考えていいかわからない」という状態に陥ってしまうのではないかと危惧している。そういう状態にならないためには、「考えることの価値・楽しさ」を実感し日常的に思考力を養うしかないだろう。そして「なるほどね！」と生徒が思えるように教師は生徒の知的好奇心を育て、刺激していかなければならないだろう。そうすることが、学習指導要領に今回追加された「数学的活動を通して創造性の基礎を培う」ことに繋がるものと考えている。

私は、大学1年の微積分通論の授業で学んだ「数列の収束の定義」は分かるまで非常に時間がかかった。大学で数学を専攻し、「分かるまで考え抜く」という行為を通して『分かるとはどういうことなのか』が分かったことが一番の収穫であっ

たと思う。このことを踏まえ、私は授業を行なう際、生徒が「(意味を)分かってできる」ことを目指している。計算ができるということでは意味があるのかも知れないが意味が分かれば、応用もきく。分かることで次の学習への意欲も湧く。生徒には、些細なことでもいいから「納得して分かる」という体験をして、その楽しさを感じてほしいと思う。

## 2. 『学び』の援助

—わかる『楽しい』授業を目指して—

沼田 須田 和幸

本校生徒にとって必要な数学的能力や「考える力」を育成するためには、次の3点に留意する事が必要であると考えている。①公式にとらわれない、個々の持つ自由な発想を生かした授業の導入・展開、②系統的な学習の上に立った、生徒の理解度に応じた反復練習と知識の定着、③「学び」の根底にある「分かる喜び」や「達成感・充実感」を意識する事ができる教材・教具の研究。これに現段階の課題として「教師は話すぎないこと」「生徒にとって必要な道具を1つだけ提供すること」がある。また、「評価」についても達成の度合や目標に対する成長の幅など更に考えていかなければならない。

## 3. 「土曜日を利用しての中高連携

～数学大好き!!を育てるために～

浦河 杉本 式史

浦河高校では、毎年地元の中学生を招いて1日体験入学を実施しており、これには、入学定員を大きく超える数の中学生が訪れている。数学科では、受験とは違った数学を楽しんでもらい、数学好きになってもらえたらということで、次のようなテーマの体験授業を実施してきた。

「円周率はなぜ3.14か」

「直角三角形の秘密」

「一筆書きの不思議」

「面積を求める」

「数の不思議」

「ゴム版上の幾何学」

円周率では、「意味と値を正確に求められるか?」ということテーマとし、鍋のふた、ガムテープ、バケツ、空き缶などを計測し円周率の計

算をしたり、情報処理室の40台のコンピュータにPowerPointの画面を送信して映像で理解を助けたりしながら話を進めた。その中で、円を切り開いて平行四辺形もどきを作ったのが、中学生の眼にはとても新鮮に映ったようだ。また、長方形を用いた面積の近似では、円を描いた図を定規で測って面積を出すことができたことが少なからず驚きだったようで、興味を湧かせることに成功したと思う。

## 4. 「創造力の育成と地域社会への貢献

～コンピュータを用いた学習活動～

穂別 横山 徹

「数学B」で、if文を用いて生徒個々のアイデアを生かした作品をパソコンで製作し、次年度も選択した生徒に対してはExcelを利用してデータ分析や近似計算を行った。そして、学校開放講座「Excel入門」(内容は「家計簿作り」、「予算決算書」)にボランティアとして参加してもらい、アシスタントとして自分たちがこれまでに学習した内容を地域社会に還元してもらった。

穂別町では、これまで小・中・高の算数数学教諭が集まって情報交換を行ってきた算数数学協議会を発展的に解消し、今年度からは数理情報系の研究会として発足する予定である。

## ●理科部会

〔全体講演要旨〕

「市民教育・キャリア教育としての科学技術教育

—拡大される科学技術教育の地平—

神戸大学発達科学部教授 小川 正賢 氏

私達の住む世界はテクノロジー化した社会で、常に変化している。5、10年後を考えて、私達が何ができるかを考えることが大切である。この点においては、中高生にはキャリア教育が大きなポイントになる。今は、大学を出てからのルートは不定である。中高生にルートを付けること、動機付けをすることが大切であるから常時先生方は、大学の先生達が何をやっているかを知らない進路指導ができなくなるわけである。更に先生方は、生徒自身が5、10年で自分を見直す進路指導をすることが大切になり、また、生徒自身が自分で進路決定すること(自己決定力)を伝えて

いくべきである。

求められるキャリア教育の視点として、「文系・理系」の区分を超えたキャリア教育が必要である。例えば、現代の企業は、環境を考えないといけない。廃液処理などを考えると、企業を管理運営する文系の人達が廃液の性質、種類、処理方法を知らないわけにはいかない。この点において、理工系の人間が何をしているのか、どんな職種があるかを中高生は知らないで、知らせることが大切である。

「キャリア教育」は、生徒に振り向いてもらう動機付けとしてやっておかないといけないものである。日常の中でキャリアを語り、テクノロジーは大切だと思わせるのである。生徒達にも多様な意志があるが、「こんなものもあるよ…」と語ることから教育課程が変わり授業が変わっていくのである。

#### ■総合理科分科会

〔意見提示〕

「北海道における

自然エネルギー技術開発の現況と課題」

北海道自然エネルギー研究センター長  
北海道大学工学部

大友 詔雄 氏

自然エネルギーは、原始自然に関わるエネルギーで、生命体が不可欠要素である。自然エネルギーの特質は、クリーン、自然と調和（食糧生産に便利）、無尽蔵、普遍的存在、無料、ローカル、高信頼性である。現状と課題として、風力（大型よりは小型集合風車を）、太陽光（発電熱利用で広い応用分野あり）、バイオマス（森林、農業、畜産の極めて多様内容へ）、雪氷（雪利用、氷利用の先進例あり）、廃棄物、水素利用がある。課題として、自然エネルギー利用で雇用促進する、内燃機関によらない動力開発がある。

（資料「開発こうほう」、「カムイミントラ」計4点）

〔研究発表〕

「北海道石油史と環境教育

～特に厚田石油史の教材開発～」

札幌開成 山田 大隆

過去に石狩管内で石油が発掘されていたことが

わかっている。地域の教材化の例として今回はお話しする。資料によると昭和8年に2万6千トン石油が採れていたが、石油は石炭の3.7倍の値段であったことがわかる。厚田・石狩・茨戸をパイプラインで結び、採掘された石油を手稲の日石北海道精油所で精製していた。以上の知識を開成高校の環境科学の授業に生かせたらと思っている。「総合理科における実験観察と評価」

和寒 宮腰 幸樹

和寒高校では2年生で総合理科を実施し、実験観察のために2時間連続の授業を設け毎回のテーマについてレポートを提出させた。また、地域巡検として海に出かけ、生物の同定や標本づくりをおこなった。フィールドの様子や天候に授業が左右され準備が追いつかないことや時間割変更・行事により授業がつぶれることがあった。レポートの評価方法について更に工夫をしていきたい。

#### ■物理分科会

〔講演要旨〕

「量子力学への招待」

北海道大学名誉教授 田中 一 氏

「夜空の星はなぜ見える」という疑問。α崩壊においてポテンシャルの壁を通り抜けるという事実。

調和振動子に働く力が弱い場合、位置の測定のばらつきは大きく、運動量のそれは少ない。それに対し働く力が強い場合は、位置の測定のばらつきは小さく、運動量のそれは大きい。これらから不確定性関係が理論的に導かれる。

次に2つ基本仮定、「仮定1：量子的状態は重ね合わせの原理が成り立つ」、「仮定2：定常状態が存在する」ということからシュレーディンガー方程式が導出され、さらに不確定性関係が導かれる。今後、メゾスコピック物理の分野が注目され量子コンピュータなどにも繋がっていく。量子力学と一般相対性理論との整合性はこれからである。

〔研究発表〕

「光を題材にした探究活動について

～シャボン玉を中心に～」

羅臼 中道 洋友

身近に鮮やかな干渉縞を見ることができるシャボン玉の教材化の試みである。セッケン液の作り方・光源の工夫（単色光用に青・緑・赤の蛍光灯と色セロファン・青色LEDなど）・干渉縞を見やすくする工夫。デジカメでの撮影など、細かい工夫が大変参考になる。授業案は①シャボン玉の観察と②セッケン膜の観察の2つ。発展としてニュートンの観察実験との比較も取り上げられている。

#### 「波動分野のシミュレーション開発」

本別 田端 修

波動分野の指導の困難性からイメージしにくいと思われる現象をとりあげ、パソコンでシミュレーションを作成した。プラットフォームに依存しないJAVAを使用。分かり易くするため現実を必要以上に詳しく再現しない。生徒は、集中が良くなり発言は増加、誤解が減少し再度説明することが少なくなった。今後の課題は生徒の活動に活かせるコンテンツの開発、多くの先生が手軽に使えるコンテンツの開発、「ほっかいどうすくーるネット」の活用。

#### ■化学分科会

##### 〔講演要旨〕

#### 「ソフト&ウエットマシン

##### ～人工筋肉をめざす～

北海道大学大学院理学研究科

教授 長田 義仁 氏

現在使われている工業製品は、硬くて乾いた材料からできている。しかし、生物の体のように柔らかくて湿っているゲルは、技術者にとっては扱いにくい素材であるが、多くの可能性を秘めている。生物のように、しなやかに、そして高効率で動くソフト運動システムの開発は、21世紀の科学技術・医療の中心課題となる。そのために必要な駆動原理や構成材料、エネルギー論について、ようやく各方面から論議が出始めている。ここでは、ソフト and ウエット材料であるゲルを用いたケモメカニカル運動システムについて、その考え方と特徴、現在研究中の「人工筋肉」の紹介などが行われた。

#### 〔研究発表〕

#### 「理科全般における授業の進め方の工夫」

美幌農業 大山 裕三

農業高校であることを生かした、教材と授業展開の工夫について、また、教材の工夫次第で今までとは異なった扱いができること等の実践例についての発表。

生徒と先生の双方向の学習の場として授業が位置づいている等の講評があった。

#### 「課題研究の実践とデジタルコンテンツ化の試み」

滝川 三浦 治彦

化学で取り組んでいる課題研究や実験について、レポートや実験時の画像を課題研究集としてデジタルコンテンツ化し、CD-Rに収録したことについての紹介。

これらの活動を通して、生徒が自信を持ったり、新たな目標を見いだしている点に感心した等の講評があった。

#### 「トンボ玉の教材化」

浦河 飯島 晶子

約3500年前から作られていたトンボ玉の歴史、トンボ玉の作り方、授業を行う上での問題点、実験の様子、生徒の感想などを紹介。

総合的な学習の時間での展開が可能であり、まさに「知の総合化」をはかれることが期待できる等の講評があった。

#### ■生物分科会

##### 〔講演要旨〕

#### 「森林生態系における

##### 大規模観測と野外実験の導入」

北海道大学苫小牧研究林林長 日浦 勉 氏

高校生物教科書の問題点は、曖昧な表現が多い点である。日浦氏は苫小牧研究林の針広混交林をフィールドステーションとして森と川の生態系における生物多様性と生態系機能について大規模観測・野外実験を行っている。その研究考察から、①森林遷移②光合成能③群落構造④炭素循環⑤食物網に関する教科書の曖昧さを指摘する。また、野外研究、特に大規模な実験・観測の重要性を説き、学際的研究の観点の元になされるべきだと述

べた。

#### 〔研究発表〕

##### 「PCカメラを使った画像の活用

～微速度撮影を用いた教材化～

静内農業 渡邊 徳彦

最近、インターネットで使われ始めたPCカメラ、パソコン、フリーソフトを組み合わせた「微速度撮影（定点観測）」の紹介。今回用いた機材は安価でファイル容量も小さくFD環境で対応でき、気軽に視聴覚教材を作成することが可能である。手始めに「かいわれ大根の発芽」記録を試み、良い結果が得られた。PCカメラで映像を記録することで「撮影即閲覧」ができるので多くの場面に応用できる方法だと思われる。

##### 「緩歩動物クマムシの教材化」

滝川 名苗 顕治

緩歩動物クマムシは体長0.5mm程度、多細胞の後生動物としては、最小の部類に属する生物。陸生のクマムシはコケの中など湿気の多い場所を好むが、乾燥状態になるとタン状態をつくり悪条件をしのぐ。今回は、クマムシの採取・飼育・観察・タン状態の作り方について発表。その中でも、ベールマン装置を用いた採取では、一度に大量のクマムシを採取でき、新たな採取法の発見となった。

#### ■地学分科会

##### 〔講演要旨〕

##### 「海洋地殻の実体の解明について

～海底掘削と潜水船による

直接観察に基づいて～

北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻

前田仁一郎 氏

海洋地殻のイメージは最近大幅に変更しつつある。海洋地殻の厚さや構成は、それを生産した海嶺の拡大速度に依存し著しく異なっているらしい。しかし、我々がもっている観察結果は断続的なものであって確定的ではない。演者は、オマーンにおけるオフィオライト（陸上にのりあげた過去の海洋リソスフェア）の調査、国際深海掘削計画による南西インド洋海嶺における海洋地殻を構成する斑れい岩類の採取、日本海洋科学技術センターの潜水調査船での南西インド洋海嶺における

海洋地殻とマンツルの連続的境界の世界初の確認などを通して、海洋地殻の実体の解明に様々な成果をあげてきた。今後、国際統合深海掘削計画により、海洋地殻を掘り抜いてマンツルに達する夢が実現し海洋地殻の実体の解明が可能になると思われる。海洋域の研究が日本の地球科学界で最もエキサイティングな課題になっていくことは確実である。

#### 〔研究発表〕

##### 「科目『地学』以外での地学教育の実践について

～総合理科・生物IIなどにおける

取り組みについて～

歌志内 藤田 秀樹

理科の担当者が2名と少ないことや担当者が必ずしも地学の経験があるとは限らないなどの理由から、発表者の学校では地学が開講できない状況が続いている。発表者が地学専門であることから、数学Iで測量実習と地図作り、物理IAで雪の結晶や積雪層の観察、生物IIで生命史など、発表者が担当した科目で地学的な内容を盛り込んだ授業を実践してきた。それは、地学という科目が学際的な内容を扱う科目であり、他教科との境界領域となる内容を多く含んでいるとの考えからである。

#### ●保健・体育部会

##### 〔講演要旨〕

##### 「スポーツと自己実現

～陸上競技からのアプローチ～

東海大学助教授 高野 進 氏

私は静岡県田舎町に生まれ、小学校2年まで小さな町の小学校にいました。その後、町の小学校に転校し、多くの児童の中でスポーツをしたことなかった私は、集団スポーツに馴染めませんでした。しかし、唯一自慢出来るのは徒競走で、走る事が周囲の注目を浴びるのが楽しかった事を記憶しています。中学校では陸上部に所属しただけの生徒でした。高校へは推薦で入学し、顧問のアドバイスもあり棒高跳びを練習しましたが、大きな怪我をしまい、そのリハビリ中に「走力をつける事から始めよう」と思いました。2年生から本格的に短距離の練習を始め、インターハイ

にも出場出来るまでになりました。その頃顧問の先生に400mを勧められ、リレーのメンバーとして高校記録を出すまでになりました。その後、推薦で東海大学に入学し、監督に「世界を目指そう」と言われ、当時48.6秒の記録でしたが1年に1秒ずつ短縮でき、4年生で45秒台まで伸すことが出来ました。大学卒業後は、自分なりに研究を重ね31歳まで44秒台になり、30歳の時には世界陸上東京大会で決勝まで進むことが出来ました。この頃は生活すべてを「走り」につなげていました。

私は大学で学生を教えています。スポーツ指導を考えると心理学からのアプローチが必要だと思えます。スポーツをする動機は、内発的な面が強ければ強いほど、選択の自由が低いほど成果が上がると考えられます。外発的動機が強すぎたり、選択の自由が高ければ効果は期待出来ません。私の陸上競技の経験とトップアスリートのヒントなどから、スポーツにおける指導の在り方や自己実現に向けてのアプローチについて、少しでも先生方のヒントになればと思っています。

#### 〔研究発表〕

#### 「運動部活動顧問のための指導ハンドブック」

高体連研究部研究委員長

札幌藻岩 近藤 壽

平成11年度より研究部として3年計画で取り組みを開始、今年度7月に完成・発行。編集にあたり、北海道大学・須田力教授、北大付属病院・青木喜満先生の監修を受ける。印刷冊数は5,000部。配布先は全道各高等学校に総クラス数の80%、その他に高体連各支部、教育委員会、各教育局、今年度新規採用教員全員。特に新規採用の教員には新任研の折に研究部より簡単な説明をして配布。

内容は大きく6項目からなる。1. 運動部活動における安全管理 2. 事故発生時の対応 3. 基本的な応急手当 4. 心肺蘇生法の手順 5. 傷害についての基礎知識 6. スポーツドクター一覧 この内容を約60ページにまとめ、利用しやすいポケットサイズで編集した。いつも携帯しながら部活動の指導に役立てていただきたい。

#### 『『生きる力』を身につける武道指導を目指して

～これからの学校体育の関わりについて～

北広島 町田 英謙

平成10年度より武道指導推進校の指定を受け、標記研究主題を設定し、生徒にいかに関心・興味を持たせながら「柔道」という武道領域の教材を効果的に活用するかを研究・実践してきた。

入学生徒のほぼ全員が柔道の初心者である実態を考慮し、1年生20時間、2年生19時間、3年生18時間を週1単位時間設定し12月をもって修了するように年間計画を立てている。学年別指導計画の作成にあたっては、第1学年（初歩の段階）第2学年（発展の段階）第3学年（個性を伸ばす段階）とおさえ、その目標達成のために3年間を見通した学習内容になるよう配慮した。

3年間の授業の発表の場として、「校内柔道大会」を実施している。試合時間は1試合1分（決勝戦、3位決定戦は2分）。各クラス代表8名（試合競技者は5名）によるクラス対抗戦。予選リーグ後に決勝トーナメントを実施。審判も生徒が行っている。

学校5日制や体育の単位数の削減などによる学校行事の見なおしがすすめる中、「校内柔道大会」を今後どのような観点で残していくかを課題として検討している。

#### 「全国学校体育研究大会からの報告

～自ら学び、自ら考え、

積極的に取り組む体育学習～

札幌国際情報 田苗 隆男

今回の保健での研究授業にあたり、情報機器を利用した課題学習の一方策として、インターネットで情報を収集し、プレゼンテーションソフトで発表資料を作成し、プロジェクターを使用して発表することに取り組んだ。

課題は比較的調べやすく取り組みやすいものとして「感染症」とした。授業の時間だけでは、物理的に限界があるので夏休みの課題とし、作成・発表にあたって多くの生徒が活躍でき、クラス全体の積極性を高める意味でグループ学習を取り入れた。

研究授業の対象クラスである2年流通サービス科は、1年次に約10時間プレゼンテーション

ソフト（パワーポイント）を授業で学習しており、ソフトの操作・編集には長けているという利点があった。発表資料作成条件として、次の3点を与えた。①発表時間は7分とする②スライド数は10コマ程度とする③各班の役割は発表・操作・作成とする。

今後の課題としては、情報機器を利用した保健学習をどのようにして位置づけるかについて明確なビジョンを描けないでいることである。できるものなら、もっと簡単に取り組める方法を模索しながら研究を深めたい。

## ●養護部会

〔講演要旨〕

「養護教諭であること・あり続けることの探求」

愛知教育大学養護教育講座  
助教授 後藤ひとみ 氏

養護教諭の役割は、子供たちの様々な健康問題に応じることによって拡大してきた。しかし、いかに時代が変容しようとも職責の本質は変わらない。その中に、多様な「見る－観る・視る・診る・看る」がある。これらの「見る」を適切に使い分けるところに養護教諭の特質がある。

養護教諭が行うべき研究は、理論から実践、実践から理論の繰り返しであり、その中から見出された理論や仮説を教育活動の中で再検証することに重点を置いたもの、つまり「実践的研究」と「研究的実践」の反復である。それは研究目的・研究対象・研究方法の三位一体で構成されており、これらの総体が養護教諭固有の方法論となる。養護の本質と独自性が実証された時、社会的に評価され、学際的にも評価される学問として確立する。

専門性を支えるのは一人ひとりの実践である。目標の魅力、成員の参加場面、成功感、人間関係における満足感などに配慮して、個人及び集団のモラルを高めるような運営ができる集団と、相互の実践を評価し高めあうような関わりの中から、専門職という位置付けが確かなものになる。

子どもとの日常的な関わりの中で一人ひとりのヘルスニーズを捉えて対応する力（第1次能力）は、個々の実態や健康問題から集団に共通する課題を捉えていく力（第2次能力）へと発展し、さ

らには教科等で指導する力（第3次能力）となって子どもたちの学習機会を広げていくことになる。これが「養護教諭としての専門的な力量」である。

自律性と創造性が求められている教育課程の編成の中、教科専門ではない（教科内容や教科書に縛られてこなかった）養護教諭だからこそ、「いかに教えるか」だけではなく「何を教えるか」を大切にして、子ども主体の関わりを展開できる。そして、「人を動かすこと・動かし続けること」「組織を動かすこと・動かし続けること」にポイントを置き、柔軟な発想・運営ができるコーディネーターであること、子どもたちの将来を見据え、具体的な健康イメージを持って主体的に取り組み続けるプロモーターであること、これらの役割が教育活動の中で展開されるところに養護教諭らしさが見えてくる。

養護教諭としての職責を全うし、専門的な能力の保持・向上にむけて努力することが、養護教諭であること、あり続けることの探求と言える。養護教諭としての自己肯定感を持ち、職への誇りと自信を持って活躍されることを期待したい。

## ●芸術部会

〔全体講演要旨〕

「北海民謡の父 今井篁山の生涯」

江別市嘱託・市史編集 藤倉 徹夫 氏

芸術部会では、札幌南高校の百周年記念館を会場に、江別市嘱託として市史の編集をされている藤倉徹夫先生の講演が行われました。

藤倉先生からは、今井篁山について、昭和初期日本を代表する民謡歌手であったこと、北海道の各地に作業歌として歌われていた北海道の民謡を発掘し、世の中に広めた人物であったこと、一生を民謡の秩序の中で過ごした人物であり、民謡の業に取り付かれたような人物であったことなどのお話がありました。その他に、現在一般に知られている民謡のルーツや、それらがどの様に今日のように変遷し現在の形となったのか、また、昭和初期の民謡ブームがどの様に発生し現在の、よさこいソーランブームにまで民謡がどう移り変わったのかなど大変興味深いお話を数多くしていただ

きました。

最後に藤倉先生より、現在の芸術の在り方について次のような提言がありました。『戦後の日本は常に欧米に追い付こうと躍起になってきた。その代償として足下にブラックホールが出来てしまっている。芸術も北海道に、へその緒を持つべきである。へその緒を持たない作品に精神的な不動産はなく、また力を与える作品にはなれない。』と。

芸術教科を担当する私たちにとって忘れてはならない核心に迫るお話に講演も盛況の内に終了しました。

#### 〔研究発表〕

##### ■音楽分科会

「小規模校の特性を生かした器楽指導の実践報告  
～リコーダーグレードテストを通じて～」

増毛 大野 光

北星学園余市高等学校での英語（グラマー）の実践を参考にしたというリコーダーグレードテストは、生徒間の音楽的能力の格差を克服し、生き生きとした音楽活動を目指そうとする発表者の願いを実現するために行っている授業形態である。

12のステップからなる各グレードは、その課題曲の構成・編曲に、各々のレベルに合わせた工夫が凝らされている。全学年で行われているこのテストは本発表の対象である3年生では生徒同士の二重奏での取り組みとなっており、そこでは互いに教え合う協力体制の状況も生まれている。

芸術の授業が、音楽のみ必修という小規模校では、ともすると音楽を「やらされている」と感じてしまう場面が見受けられる。達成感・成就感を伴う自主的・主体的な取り組みを目指して、発表者は日々工夫を重ね続けている。

##### ■美術分科会

「小規模校における美術教育の実践

～教材づくりと指導法の工夫～」

長沼 渡邊 敬之

授業において、導入時の反応は良いが集中力や意欲が持続しない。能力、学力差がある。発想力、想像力が乏しいなどの生徒の状況を踏まえ、いろいろな教材において工夫をこらしながら実践を行

う。特に指導の視点を「つながる（既習技術との組み合わせ）」、「ひろがる（発展性のある教材）」、「かわる（発想・視点の転換）」、「きがる（教材の簡素化・合理化）」の4点に絞り、生徒が生き生きと活動できる教材づくりと指導を目指す。3学年の教材「アニメーション」では、パラパラ漫画をその原理と制作過程を学習しながら、ビデオカメラにおさめる。身近なものでアニメーションができるという驚き。自分の描いた線がスクリーンの中で動いて見えた時の感動やお互いの作品を楽しく鑑賞することを大切にするといった指導を行う。

##### ■書道分科会

「網走管内書道教育研究会の歩み」

北見緑陵 若松 顕仁

近年、間口減に便乗した書道軽視が小規模校から地方の都市部にまで広がっている。いきおい教科担任も専任から講師へ、更に芸術選択からも外される傾向に発展している。網走地区では、この現状を打開すべく「高等学校書道教育研究会」を設立した。

学校現場での理解を得るために、管内の書を愛好する教職員にまで枠を広げた立ち上げの経緯から6年間の地域に開かれた実践、そして組織づくりが活動に幅をもたせ地域や他地域との結びつきから生徒への還元につながる活路を見いだそうとする展望が発表された。

研究協議では、地方組織の活動状況が報告される中で小中学校との連携や高校間の授業研究を軸にした関係づくりなどの事例が紹介された。

科目の存廃は、校内の「書」の存在そのものに大きく影響するとの危惧から、意識して守るべく確認がなされた。

##### ●英語部会

〔講演要旨〕

基調講演「金魚鉢から大海へ

－英語学習と生きた英語の架け橋－

模擬授業「Display Activities と

Referential Activities の併用」

上智大学教授 吉田 研作 氏



●『金魚鉢』モデルの英語教育とは、整備され保護された人工的な環境の中で行われる、教師主導で正しい知識を教え込むものである。これからは、生徒が自律的学習者となれるような学習環境を作り、言語学習の必然性を示し、『大海』に向かって泳ぎ出せるスキルと、何より学習動機、意欲を育てるべきである。そのためには display activities (答えが決まっています、教師主導の学習活動) と referential activities (言語形式よりも答えの内容を重んじる、生徒中心の学習活動) の併用が必要である。

●基調講演内容を引き継ぎ、両活動の併用をOCIの『症状・病院』の場面を使って実践した。基本的表現を習得させた後、生きた実際の表現を生徒から引き出し、クラスで共有し、ペアワークで練習する。教師と生徒が、また生徒同士がインタラクティブしながら、自分たちで様々な英語を学べる環境と、『大海』に向かう姿勢を作り出すことが大切である。

#### [研究発表]

#### ■第1分科会「生徒が輝く仕掛け作り」

##### 「小規模校における基礎指導」

北見仁頃 石橋 栄

仕掛け作りには、最低限の基礎学力(知識と技能)とルール感覚の醸成が必要である。生徒の実態を分析した後、リスニングと音読の training を多用し、英文読解に記号づけを行い、学校全体で授業規律の徹底を図った。その結果、積極的に取り組む生徒が増えた。

「Two JTEs and one ALT in a small school

～ cooperation」

中川商業 新江 雅宏

一間口の小規模校。JTE 2名とALT 1名でTTをしている。TTの前後には綿密な打合せと各教員の役割分担をし、生徒のやる気を引出している。また教員間で日常的に情報交換を行い、地域・ALTとの連携を通して、教員率先して英語を使う取り組みをしている。

#### ■第2分科会「ALTとチームティーチング」

##### 「ALTとのTTに対する

##### 英語科としての取組み」

様似 清水まゆみ

ALTとの効果的なTTの在り方を模索し、4年前よりTTの交代制を導入。当初一人の教員の仕事であったTTは、現在では英語科全体のものに。またTTは生徒の英語学習への大きな動機付けになっており、今後はOCA以外の授業へも交代制を導入したいと考えている。

「Activities about Grammar」

網走向陽 福浦奈朋子

ALTとの授業を楽しみだけでなく、文法とspeakingを結びつけるものにしたいと考えた実践。All Englishで授業を行い、pair group workがしやすい環境を作るなど工夫し、既習文法事項を使ってcommunicationできることを目指す。Speakingに留まらず、writingへとつなげたい。

「TTでの少人数指導の取組み」

鹿追 佐々木真一

進度の遅い生徒への指導の限界等の理由から、全員参加のカナダ短期留学も実施。通常は習熟度別でなく男女比のみを考慮した少人数TTにより、生徒が英語で話す際のストレスを軽減。教員に個別指導をするゆとりが出た。さらに実践的コミュニケーション能力の育成へとつなげたい。

#### ■第3分科会「シラバスデザインと

##### スーパーイングリッシュの取組み」

##### 「南陵高等学校3か年シラバスの

##### 取組み」

札幌南陵 俵谷 俊彦

生徒の英語力向上のため、英語教育を取巻く状況の変化を考慮し、また大規模校における問題点を洗い出した。英語科の『システム』としての役割を強固なものとし、科内の研修会の充実を図るとともに、プロジェクトチーム(CAPT)を創設し、シラバス作成へと発展させた。

「実践的コミュニケーション能力の

育成を目指して」

札幌国際情報 小西 晃

生徒が英語に触れる絶対量を増やし、発信型の

授業を展開している。本文の和訳先渡し授業や、アルバータ州立大教授の指導を受けた授業作りなど、多彩な取り組みを行っている。特に pair work で教師役となった生徒は、意欲の向上が顕著である。

#### ■第4分科会「高校英語のバージョンアップ」

##### 「Authenticity を求めて」

函館中部 今井 康人

1年次は、20人規模でOCBをnative speaker(以下NS)によるall Englishで行うほか、全員参加のspeech contestを実施。2年次では週1回、NSの専門教員によるEnglish Compositionの授業を設置。そのほか生徒の創造性が発揮されるskit contestを実施している。

#### ■第5分科会「中高連携・中高一貫を目指して

##### ～中学校の現場から」

##### 「中学校での実践的

##### コミュニケーション活動と

##### 評価の実際」

札幌市立中島中 木村 嘉宏

コミュニケーションの必然性を体感させるために、入学時から授業はall Englishで展開。評価規準は予め生徒に提示。生徒はdictationのほか、英語による発信活動としてShow & Tell、日記などに積極的に取り組んでいる。

#### 「中高一貫の実践について」

立命館慶祥中高 竹中 宏文

一貫教育独自のカリキュラムに基づく授業経営。1年次は語彙と発音、2年次は海外研修に向けて発信型を意識しwritingとspeechに重点を置き、3年次は習熟度別を考慮してWB T型教材を利用。T、Tや『個別授業』により、個々の能力を最大限に伸ばすことに注力している。

#### ■第6分科会「やる気をださせる知恵と技」

##### 「学習意欲向上への

##### 働きかけについて」

稚内 徳長 誠一

生徒が学習内容に展望を持つようと、様々な方法論を実践してきたが、英語の単位数の少ない専門高校では、英文に『記号』を書込んで構造的に英語を理解させることが有効であった。常時留意しているのは、生徒にとって価値があり興味を

引くような教材を提供することである。

#### 「僕(私)にだってわかる」

札幌星園 中村 正人

学習指導要領に定められた『学校設定教科』制度を生かし、本校では『実践文化』という教科を設定し、そのコースの1つに英会話を設けた。ALTとのTTで行い、ゲームも交えたりしながら、英語で世界の人たちとコミュニケーションする実践的能力の育成を目指している。

#### ●家庭部会

##### 〔講演要旨〕

##### 「スローフードと食の安全性

##### ～地球環境を守り、

##### 人々のモラル再生を果たすことが大前提～」

拓殖大学北海道短期大学教授

相馬 暁 氏

今、食を取り巻く環境はどうであるか。白米を蒔いて米を育てようとする主婦の例にみられるように、食物を作る農業と食がかけ離れすぎている。食と農をつないでいかなければならない。

20年前の食生活は、日本の長寿を作った理想の食事であった。主要なたんぱく源は魚や植物性たんぱくであったが肉の摂取が多くなりバランスが崩れた。また、現代の食生活に見られる「5つのこ」が日本型食生活を後退させている。「孤食」「個食」「小食」「五食」「戸食」の5つである。インスタントラーメンが世に出た昭和43年以降生まれの人の寿命は41才になるという説もでている。

このような中、イタリアで起こったスローフード運動に注目したい。地産地消の考え方であるが、中でも子どもの舌を守ろうという食育の考えが重要である。少年事件など引き起こす心のバランスの崩れには、ビタミン「愛」を食事に取り戻すことも重要である。食のひずみを直すことが社会のゆがみを直すことにつながる。今こそスローフードな生き方に転換する勇気を持って進めていこう。

##### 〔研究発表〕

主題「自立した生活者を育てる家庭科教育」

(1) 新教育課程の実施に向けて

## ①「生活を創造する力の育成を目指して」

札幌厚別 今多 靖子

普通教科「家庭」のミニマムエッセンシャルズとしての「家庭基礎」について年間指導計画の例、体験的・問題解決的な学習の展開例が示された。人の一生を縦軸に、指導要領の示された項目を横軸としたマトリックスを作成し展開されている。

普通教育としての家庭科は「男女が協力して家庭や地域の生活を創造する能力を育成すること」をねらいとしているため、実践力や問題解決能力を育成することが大切である。

## ②「より確かな職業観、

勤労観の育成を目指して」

岩見沢農業 坂口真奈美

家庭科の専門教育において新設された原則必履修科目「生活産業基礎」の年間指導計画、授業展開例、体験学習の展開例が示された。

将来のスペシャリスト養成という大きな目標のスタートに位置し、礎となる科目なので大切に考えていかなければならない。

### (2) グループ討議

参加者全員が10人前後の9つのグループに分かれて討議を行い、それぞれからまとめの発表がなされた。研究発表をふまえて、各校の新カリに向けての現状や問題点、日頃の実践交流などが活発になされた。

## ●農業部会

〔講演要旨〕

### 「食糧生産基地北海道の行方」

—新たな農業教育の推進をめざして—

北海道東海大学工学部生物工学科 西村 弘行  
研究成果を還元し、過疎の町で若い人が戻ってきて働けるようにするという意味で2社のベンチャーを持っています。北海道農業はグリーンアイランドと呼ばれ、食糧基地として位置づけられているが、農業生産者は実際には厳しい生活を強いられているのが現実です。その理由としては、貿易の自由化による海外から安価な農産物の輸入が上げられている。最近では、中国産の椎茸やねぎなどが記憶に新しいところです。また、たまねぎがたくさん入ってきます。しかし、たまねぎの

血液さらさら効果に着目し、健康なたまねぎを栽培することで、他との差別化をはかっていけるのではないかと考えています。今こそ、道産の農産物を見直し、アグリエコインダストリーや農業特区などによる農業の育成につとめるべきだと考えます。また、消費者のニーズに答えた「安全・安心」の農業生産や「植物に教えられた宝の山を生かす」ような実践的な教育、環境教育、起業家精神教育を推進しなければなりません。最近では国立大学の教授のベンチャー進出も認められました。我々北海道東海大学でも新たな発想で、地域に還元できる研究を進めていくつもりです。

〔研究発表〕

### 循環型農業への挑戦！

静内農業高校 伊與部 明

循環型農業への取り組みとして、本校では土壌有効微生物の活用が行われており、資源循環バイオ実習室を着工し、平成14年度より運転が開始されている。この実習施設は、牛馬の糞尿を有用な資源として農業生産に活用できるように固液分離して、液（尿）を好気性微生物により分解処理し、悪臭や有毒ガスの発生を抑えたり、液肥として圃場に散布することにより化学肥料の量を節約することができる。

この「循環型農業」の分野を「軽種馬の生産」、「フードシステム」と並んで、本校の畜産教育の柱としてカリキュラムの中に取り入れて充実・発展させることが、地域から期待される、魅力ある農業高校となる起爆剤のひとつとして考えている。

「個に応じた特色ある農業教育の

創造と実践を目指して」

～小規模校における柔軟な

教育課程編成の取り組み～

東藻琴高校 森川 哲・神田 大介

本校は、平成元年度入学生からコース制を取り入れ、翌年度には生産学科へ学科転換を行い、地域に根ざした教育活動を展開してきた。その一方で、大きな学力格差、進路意識の希薄さ、学習意欲の欠如などの現状が見受けられ、特定の分野の学習しかできないというコース制の弊害も生じている。そこで、生産・加工・流通について学習す

る生産科学科として、「コース制から科目選択制への移行」「履修単位数と修得単位数の分離」「2学期制の効果的な活用」「習熟度別授業の導入」等の改善策を実施している。今日、農業・農業関連産業はもとより、それ以外の分野においても農業教育で身に付けた知識や技術を基盤として活躍できる人材の育成を視野に入れた教育が求められている。

## ●工業部会

### 〔講演要旨〕

#### 「日本のものづくりと人づくり」

ものづくり大学学長 野村 東太

ものづくりは、人間の持っている特色であり、経済・社会の基盤になるものである。しかし、日本ではものをつくる後継者がいなくなった。原因はものづくりの構造に問題があった。ものは世界的には不足しているが、日本のような先進国ではものが溢れ、「もの観」が変わってきた。

ものづくりから若者が離れたのは、若者全体が無関心、無気力、無感動という言葉で代表される者が増えてきたことによる。

原因は、物溢れ、努力しなくても生活が出来るのでハングリー精神がなくなった。さらに、学歴社会から実力社会に変わり、学歴の魅力はなくなり、大学も誰でも入れるようになった。そして、目標がはっきりしない若者に対する教育の遅れがあった。

大量生産により、ものづくりが見えない、体験、感動の機会を若者から奪った。大量生産の分業体制下で、人々が歯車になったため全体が見えていない。全体像が見えないので勤労意欲がなくなり、達成感がない。

旧来型の一般技能の社会的な価値が低下してきた。つまり、今まで手と道具に頼ってきた人の尊重されていた技がNC機械である程度可能になると、生涯給与が減るのを若者が見ている。

従来 of 技能者育成環境が変わった。昔の徒弟制度は教えない、つまり、自分で考え身につける教育であった。今の社会では多大な情報があることを悟らしめ自分で吸収していかに処理するかについて一緒にやる必要がある。

## 〔研究発表〕

### 主題「時代の変化に対応する

#### 工業教育の創造と実践」

#### 「電子工作を取り入れた実習の実践

##### （同期式10進カウンタの製作）」

富良野緑峰 今堀 祐

同期信号の入力により、回路の状態が変化する。これはカウンタの基本的な動作であり、この考え方は他の電子機器にも広く応用できる。

この実習装置は、パルスの発生方法や、出力の形式をわかりやすく工夫している。

この実習の目的は、回路を実際に製作して、動作を確認し、その原理を理解することであり、このような基本的な学習こそが、これからの工業科にとって重要である。

#### 「就職慣行の見直しについて」

札幌琴似工 猪瀬 徹

雇用情勢が厳しい状況の中、北海道の工業高校においては、就職希望者の内定率は高い水準を維持しており、今までの就職慣行が適切に機能してきた「証」であり、今後も堅持されるものと思われた。

平成14年3月5日（火）の新聞報道において「高校生の就職難『一人一社制』廃止応募多様化を」（読売）、「高校生の『一人一社制』『指定校制』就職慣行を見直しへ文科・厚労省」（朝日）などの見出しが掲載され、はっきり言って驚きを隠せなかった。

この「就職慣行の見直しについて」、どのようにして「見直し（廃止?）」に至ったのか、経緯や背景などについて調査・研究し、今後どのように対応し、どのように取り組めばよいのか、発表の内容が各高校の参考になればと思い進めて参りました。

#### 「工業所有権教育について

##### ～「平成12年度工業所有権教育実験協力校」

##### としての取り組み～」

芦別総合技術 山本 克郎

本校では、平成12年度の工業所有権教育実験協力校として、「工業所有権標準テキスト」の有効活用と工業所有権教育の内容・方法の充実をねらいとして、「課題研究」を通じて考案された

発明を工業所有権化することに取り組んだ。そのなかで、生徒は工業所有権化の意義を理解し、主体的に専門的な知識と技術を生かした問題解決を図り、特許出願などの工業所有権について、より身近なものとしてとらえ理解を深めることができた。

## ●商業部会 .....

共通主題「新時代に求められるビジネス教育

—学校そして人づくり—

〔講演要旨〕

簿記教育と会計基準の変化について

札幌学院大学 坂下 紀彦

簿記は単なる記帳技術ではなく、会計学の一環、つまり社会科学の一領域であり、社会制度や経済制度を支え、作り上げていくものである。特に最近の5年間は会計が企業を変えるとさえいわれている。

簿記・会計の社会的な役割の領域はここ2、3年拡大しており、環境問題に対する取り組みである環境会計や官庁の経済活動に対する取り組みの公会計、日本経済全体の経済活動の把握に対する取り組みの社会会計などがある。

また、会計基準の変化に伴い、企業においては各企業の経済的実態の開示が大きな目的となってきている。

簿記を学習するとことは多くのメリットがあり、企業の仕組みを理解することにもつながる。

国際的な会計・監査における日本の役割も重要であり、多くの日本人が国際的な舞台で活躍をしている。

日本の簿記会計の底辺をさせている教育を行っていることを商業担当の先生方には自負していただきたい。

〔研究発表〕

「本校の特色ある教育課程について」

美唄 伊藤 康生

(発表内容)

「本校の特色ある教育課程について」というテーマで発表した。総合選択制という学科の枠を超えた授業形式と、環境科学という教科横断型の授業の取り組みについて考察した。

「美唄高校を卒業して本当に良かった」と生徒が自信をもって言えるそんな教育課程を目指し、人的資産である、全教職員の英知と協力体制を大切に丁寧な日々の教育活動にあたりたい。(以下、発表内容の項目)

- 1) 美唄高等学校の概要
- 2) 美唄高等学校の教育課程について
  - ・教育課程編成の方針
  - ・教育課程の特徴
- 3) 「総合選択制」について
  - ・「総合選択制」導入までの経緯と特徴
- 4) 全教科で取り組む「環境科学」の実践について
  - ・「環境科学」実践までの経緯
  - ・実施の骨子
  - ・「環境科学」実施上の共通認識と配慮事項
  - ・具体的学習内容
  - ・実践上の課題と今後の展望
- 5) 教科(情報ビジネス科)としての取り組み
  - ・商業クラブの取り組み
  - ・大学、企業見学会
  - ・課題研究発表会
- 6) まとめ(資料:平成15年度 教育課程表他)(質疑応答)
  - (北見仁頃高校) 共通選択科目の精選は何年周期か?
  - (美唄高校) 総合選択科目は進路関係で必要な生徒がいるため原則的に1人受講でも開講し、現在3年経過しているが見直しはまだ行っていない。
  - (知内高校) 普通学科・専門学科があるが、教科を呈示する際、教科のレベルは生徒に伝えるのか。また、選択者の学力格差がある場合はどうするか?
  - (美唄高校) 内容のみ呈示され、生徒のレベル分けまではされない。
  - 「総合的な学習の時間」の評価について各学校での状況は
    - (洞爺高校) 学習後、生徒自身で感想や報告書を作成し、活動やそれらの内容から文章で評価している。
    - (上士幌高校) マニュアル的なものを作成し決められた記述で評価している。

助言者

札幌国際情報 教頭 板宮 克芳

美唄高校の伊藤先生の発表では、1学年の共通履修科目として「環境科学」を2単位で、全教科による横断的・体験的・実践的な学習を行っているが、これは、新教育課程のねらいを捉えたよい実践であり参考になる。

「総合的な学習の時間」の評価は、主観的な評価になりがちであるので、客観的な評価になる様、十分考慮していただきたい。また、「総合的な学習の時間」だけでなく他の教科においても4つの観点(①関心・意欲・態度、②思考・判断、③技能・表現、④知識・理解)の評価を基本として評価基準を作成していただきたい。そして、生徒がそれぞれの学校へ来て良かった、楽しかったと思えるような学校にして欲しい。

滝川西 学校長 木村 勝彦

履修と修得の分離については、育てる生徒像が教育課程表上にある以上、すべてを履修し修得させることが大切である。単位制の趣旨を生かす分離のためには、教員の共通理解が不可欠である。次に、新年度に実施する教育課程に、商業教育のキーワードである「ビジネスの理解」、「実践力」、「創造力」、「豊かな人間性」を育む内容が具現化されているのか点検して欲しい。また、各学校が掲げる目標や育てる生徒像が教育課程表に具現化されているのか、実践の手だて等についても確認をしていただきたい。

〔研究発表〕

## 第2分科会体験学習

### 「インターンシップの取り組みについて」

稚内商工 千葉 貴仁

平成13年度(初年度)インターンシップは、校内に推進委員会を発足させ地域パートナーシップ推進会議を設け地域との連携を図りながら、1年生「ジョブ・シャドウ(見学)」、2年生「オンザ・ジョブ(実習)」として実施。

実施内容は、1年生については希望者のみ、受入企業の都合優先し、10月～12月で半日間、企業担当者1名につき生徒1～3名で実施。事前準備として、生徒に個人カードを作らせ、それを基に放課後2日間キャリアパスウェイチーム(教員・

企業・関係機関・保護者で構成)との面談。面談後、見学先の決定、生徒自身が依頼文書作成送付。見学時、生徒は写真撮影・自己評価・インタビュー・観察課題を記入しまとめる。見学後、礼状送付・ポートフォリオ(記録集)用の原稿提出。2月に1・2年生全員と企業関係者・保護者・報道関係者を招いて、稚内総合文化センターで全体発表会を実施。事前に校内発表会を行い、クラス代表者を決め、その代表者が全体発表会で発表する方法とした。校内・全体発表会いずれも同じ審査基準で生徒が審査し代表・最優秀賞など決めた。

2年生についても希望者のみ、11月～12月の間で3日間、1社につき1名の生徒が実習。それ以外の内容・手続き等は1年生とほぼ同じ要領。

実施した結果、「生徒・企業ともに全体的に良かった」「資金面・企業との関わりでハローワークの重要性がわかった」「予算措置が必要であった」など成果が得られた。

平成14年度は、1年生「現場見学」、2年生「就業体験」と改名し、2年生の実習受入期間を短くし3日間実施。

平成15年度は、1年生の企業見学は希望者のみ、2年生の就業体験は「総合的な学習の時間」で全員実施予定。

発表後、多数の質問が出てきた。近郊の学校の実施状況、企業側で憂慮していること、企業側の反応・評価(要望事項)、実際に承諾を得られた企業数、仕事(業務)内容、行政側での取りまとめが行われているか、詳細な目的や意義について、初年度予算措置がされていなかったがどのように実施したのか、実習に参加しない生徒の扱い、推進委員の構成、単位認定について、インターンシップを行ったことによって就職実績は上がったか、1年生での「ジョブ・シャドウ」は全員参加でも良いのではないかと、教育課程上の位置づけ、その他様々な事について質問が出てきた。

その後、各校の取り組み状況や現在抱えている問題点、これからの課題等の情報交換が行われた。

最後に助言者の先生より、各校のネットワーク作りの必要性・外部とのふれあいの重要性・教育課程上の位置づけ・ねらいと目的などをしっかりと話し合い、周到な準備をして取り組んでいくこ

とが大切であるということが話された。

また、地域・学校の実体にあった体験学習を実施するにあたり、先進的な学校に聞くなり、資料を収集をして活用してはというアドバイスがあった。そして、商業の専門高校で望ましい職業観・勤労観を育成する中に、環境保全という考え方と正しい企業倫理をインターンシップを通じて目的の中に入れて、様々な教科・進路・学校全体で取り組んで欲しいという話がされた。ポートフォリオ（履歴）は指導と評価が一体化されたもので、効果的に指導でき、3年になってからも進路指導に役立つのでぜひ利用して欲しいということであった。

#### 「江別高校における進路指導」

江別 秋本 直人

##### 1. 学校の概要

普通科6間口、事務情報科2間口、生活デザイン科1間口で、進学が約8割である。100%近く、江別市内から通学する。

##### 2. 進路指導について

自分の将来や進路意識が希薄であるということで、3年間を通した進路計画に基づき、学年、教科、他分掌との連携を図りながら進路指導をしている。具体的には、次のようである。

##### 3. 分野別進路ガイダンス

これは昼休み中実施したが、先生方に多大な負担をかけてしまった。「推薦がどうしたら通るか？」というのが多かった。進路指導の目玉であったが、見学旅行との時期が悪かった。

##### 4. 進路講演会

外部講師によるもので大学と短大の内訳をどうするか、グループ分けをいくつにするかも難題だった。結局、分野別に業者に頼むことになった。

##### 5. 終わりに

進路ガイダンスをすればするほど、生徒の進路意識が薄れるようで、何か新しい工夫が必要である。

(質疑応答)

◎出前講座は受けていないのか？

受けていない。

◎他の外部情報を利用していないのか？

していない。

◎離職率が高いといわれているが、対策は？

就職意識の高い者が就職しているの、特にな

◎追跡調査はしているか？

していない。

◎業者に頼んだ講演は、PRのみにならなかったか。

そういうことはなかった。

以上で研究発表は終わり、後半は進路指導に関する情報交換で終了した。

#### ●水産部会

〔講演要旨〕

「水産教育の今日的課題」

全国水産高等学校長協会前理事長

赤津 豊 氏

学習指導要領の今度の改訂では完全学校週5日制の下で、「ゆとり」「特色ある教育」「生きる力」などをねらいとした教育をいかに完成させていくかが課題となる。

少子化、経済不況、高度学歴社会、それに伴う学校再編など、専門高校への冷たい風が吹き荒れる中でも、水産・海洋高校へのそれはきわめて厳しいものがある。

しかし、水産・海洋産業は人間の存在そのもの、生命に関わる産業である。特に四面を海に囲まれ、魚を中心とした食文化を有する日本人にとっては、かけがえのない産業である。なのに、水産・海洋教育は後退をしていく。正に、そこに水産教育の今日的な課題がある。

遠洋航海実習による国際理解や交流は豊かな人間性や社会性を育み、「人との触れ合いを重視する実学」として、日本人としての自覚を育成した。「もの作りや高度な資格の取得を目指した実学」は、自ら学び、自ら考えることを基に、より高度な知識や技術を習得させてきた。「ゆとり」とは、限られた知識の修得という幅の狭い学問ではなく、生きていく上でのより多様な知識・経験との触れ合いを目指すものとすれば、学ぶ知識の幅の広さ、心を育てる体験の豊富さ、が「ゆとり」教育の目指すものであり、そこから生まれる「生きる力」に期待するものではないか。これこそ、水

産・海洋教育が実践してきたことである。

「個性を生かす教育」についても、高等学校に自分さがしのモラトリアム解消教育を求めているものではあるまい。より高度な専門性が要求されてくるこれからの社会において、より有為な人材が求められる中で、義務教育の中で目覚めた個性をより発展させる教育と捉えることが、前向きな捉え方であろう。とすれば、水産・海洋教育がたどってきた道は、正に、個性を生かす教育そのものであり、その成果を、多くの卒業生が実社会の中で証明してくれている。

従って、水産・海洋教育の今日的課題は、我々がやってきた、この素晴らしい水産・海洋教育を、如何に地域に認識させ発展させていくかにある。その活路は、学校、地域、そして日本人の認識を改革することを根底としながら、それぞれの教師が、水産・海洋教育進展の旗印の下に、自らの価値観に基づいて、自ら選択した課題に、主体的、創造的、情熱的に取り組むことにある。

〔研究発表〕

「船用ディーゼル機関による

大気汚染の現状と対策」

函館水産 中野 専司

船は高速で航行するほどより多くの環境汚染排ガスを放出する。陸上の施設や交通機関は、規制により汚染物質の排出量が減少しつつあり、船から排出される環境汚染排ガスにおいても国際的な規制や低減のための努力が検討されている。これらのことを踏まえ、総合実習、課題研究等でこのテーマについて取扱い、乗船実習から得られたデータを用いながら展開してはどうかという提言があった。

「無線従事者養成校の科目内実習における

効果的な教材について」

戸井 木村 昌志

簡便化された手作り教材の利用や、使用する教材を豊富にして実技中心の実習にしたり、経験談等を授業の中身と絡み合わせたりして、総合実習では取り扱わない内容を教科内実習の形で取り扱った。その結果、教科書中心の授業よりは“食いついてくる”成果が見られた。

科学離れという言葉が社会的な問題となりつつ

ある中、科目内実習等を取り入れながら授業を工夫していく必要があるという提言があった。

「水産高校における

ダイビングの指導方法について」

厚岸水産 菅沼 俊介

産業教育実技講習等の経験から、「潜水用具の管理について」「安全管理について」「昨日できたものが今日できるとは限らない」「無理はさせない」といった基礎的指導方法を取り上げ、考察した。

その結果、この指導には個々の特性に応じたきめ細やかな計画と指導法が必要であり、初心者に対しては、潜水中の安全指導や安全管理および恐怖心の払拭等に重点をおいて指導することが重要であるという提言があった。

## ●情報部会

〔講演要旨〕

「情報教育の展開と

新しいメディアリテラシーの育成」

関西大学教授・大阪大学名誉教授

水越 敏行 氏

教科情報をメディアリテラシーの観点でとらえ、「教室王国」ではない、外とのコミュニケーションを柔軟に行う学校環境作りや具体的指導法、実践例などについて講演。

〈内容〉

- ・情報活用を推進するための条件整備  
教科情報は小中高の各段階で螺旋的に指導されるものであること
- ・コンピュータリテラシーよりも、メディアリテラシーやコミュニケーション教育を
- ・教科情報の「総合実習」をどう展開するか  
プロジェクト学習や遠隔地間ディベートなどの実践例に学ぶ
- ・情報モラルの指導はどうあるべきか  
個人認証の方法や指導法について  
メールのマナーについて

〔研究発表〕

1. 「新教科『情報』で準備していること」

富川 小笠原 節

生徒を情報の消費者で終わらせることのないよ



うに教科「情報」実施へ向けて準備していること  
の発表。

## 2. 「情報Aデジタル教材開発プロジェクト」

北海道高等学校情報教育研究会共同研究

南茅部 川崎 知文

北海道高等学校情報教育研究会で行われている  
活動のうち“情報Aデジタル教材開発プロジェク  
ト”についての発表。

## 3. 「評価規準と評価基準表 Rubric を用いた評価 はどこまで可能か」

札幌北 奥村 稔

文部科学省では普通教科「情報」の評価基準、  
評価方法等の研究開発を進めている。Rubric を  
用いた評価についての説明・解説と、現実の授業  
での利用での留意すべき点などについて発表。

## 4. 「『学校図書館』と『情報』（生徒の意識調査 分析と『情報』の授業に向けた実践例）」

札幌南陵 菅原 陽

情報発信者を育てるための授業を、生徒の生活  
意識調査と読書傾向からの分析結果を基に行った  
実践の発表。

平成 15 年 2 月 28 日 印刷  
平成 15 年 3 月 4 日 発行

北海道高等学校教育研究会

印 刷 株式会社さんけい  
札幌市西区八軒 10 条西 12 丁目 2-48  
TEL (011) 611-8866  
FAX (011) 611-0422